
彼らの日常

駄目人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らの日常

【Nコード】

N7306N

【作者名】

駄目人間

【あらすじ】

世界に異能力者がいる時代でそこにいる主人公の話。彼は、『飾りのトップラנק』と呼ばれていた。

転校生

少し先の未来、一人の人間がいままでの人類にはなかった驚異的な身体能力を持って生まれた。

それから少しずつそういった異能の力を持つものを異能者と呼んだ。それから時は流れ、異能の力を持つ『異能力者』を世界は受け入れていた。

朝起きると宇治川憲司の目の前に時計が8時を指している絶望が広がっていた。

「ぐああ！？、なんでアラームが鳴らなかったんだ！」

実際には鳴っていたが憲司は気づかずに寝ていた。

「くそつ、最悪だ！」

そういいながらもテキパキと服を着替え洗面台で顔を洗い歯を磨いていた。

急いで憲司は学校に向かった、しかしこの後7秒の差で教師に怒られワイシャツのボタンを掛け間違えたせいで笑われることになることになるとはまだ知る由もなかった。

この世界では無能力者用の学校。

異能者用の学校、の二つが用意されている。

危ないからという名目らしいそんな学校のうち異能者用の学校、櫻ヶ岡高等学校の一学年では季節外れの転校生が来たことで盛り上がっていた。

そんな中憲司は友達に笑われていた。

「バカだなあワイシャツのボタン掛け間違えるなんて」

憲司とは中学生からの付き合いの栗木尚也が言った。

「ほんとだよお。もう高校生なのに」

苦笑いしながら同じく中学生からの付き合いで仲のいい安住イクが言った。

「うるさいな。急いでたから間違えちまったんだよ」

恥ずかしさからそっぽを向いて言った。

「それにしたってなあ」

「しつこいぞ、誰にだって間違いはあるだろ」

「そうだよ、あんまりからかうのもよくないよ？」

気遣いが出来、優しいイクが言った。

「そうそうほどにしる、そういえばD組に來た転校生見たか？」

「いや、見てないぜ。でもなかなかのイケメンらしい」

「女子の中では結構噂だよ、かつこいいしランクAなんだって」

「ふうん」

ランクとは計測器<チェツカー>による力の干渉度の強さのことだ。Aはかなり稀少で、なおかつ戦車程度なら囲まれても問題ないくらいの強さだ。

「二人もAがいるなんてすごいなこの学校」

「そうだねー」

大体の人はDかCなのでランクBのイクも実はかなりエリートだったりする。

ちなみに尚也はDなのでまあ普通だ。

「まあそれでも世界に11人しかいないsランクの誰かさんに比べればたいしたことないけどな」

そう憲司は世界に11人しかいないsランクの異能者。しかもチェツカーではいつも最高の数字を示す能力者かし。

「何の能力かも分からない『飾りのトップランク』なんだからカウントされないだろ」

そう、憲司はランクsしかし未だにどんな能力か分からないのだ。チェツカーは使われた能力から干渉度を測定するつまり一番ベターな強化も発動しなければ測定できないのだ。

しかし憲司の測定の場合常に干渉度s。ということはなんらかの力を常に使っているということに他ならないしかし見た目ではわからない強化も身体能力は上がるので憲司のように無能力者ていどの身体能力はありえない

なので完璧に謎の能力なのだ。

「もうめんどくさい事は良いよそれよりご飯食べに食堂行かない？」

「ああそうだな」

「異議なしー」

そして三人はいつものように食堂に行った。

転校生（後書き）

すみません、つまらなくてすみませんしかし出来れば続けて読んでいただけるとうれしいです。

戸倉 善（前書き）

同じ名前の人いたらすみません

戸倉 善

食堂はいつもより混んでいた。

「何でこんなに混んでるんだ？」

「あれのせいじゃね」

尚也がいやそうな顔で指差した所には女子に囲まれた机があった。机には見知らぬ男子が座っていた。

「尚ちゃん気にいらなそうだね？」

「おれは、俺はなアあいう奴がこの世で一番嫌いなんだよお！」
よく分からないがしつとなんだらうと憲司は思った。

「それにああいう奴は大体ろくでもない性格だしな」

勝手な偏見で決め付ける尚也。隣にいたイクはこれだからなーというため息をついたが尚也は気づかない。

「まあとにかく机に座って昼ご飯でもたべようぜ」

そう言われてようやく落ち着く尚也。ちなみに、イクは美少女と呼ばれるでも差支えないほどかわいく、憲司は影では女子にモデルのでモテないのは尚也だけということを知り男子二名は知らない。

三人がそれなりにメニューが多い食堂から好きなものを選んで座ったところには食堂もかなり混み始めていた。

「そつえばあのモテモテ野郎Aらしいけど何系の能力なんだろうな。」

「さあ？でもそれはマナー違反だよ」

本人が自分から進んでは無い時は基本的にどんな能力か聞いたたりするのはよくないとされている。

能力は基本的に三種類に分類される。

一つはもつとも多くみられる自分の身体能力を上げる強化タイプだ。しかしほとんどの能力者はせいぜい普通の人間よりかなり身体能力がいいくらいだ。それでも能力が高い者なら弾丸をくらっても大丈夫になるほど化け物じみた能力をもつので多く見られるからといっ

て弱い訳ではない。

二つ目は能力者自身の性格にあった武器を出す創造能力である。刀であったり銃であったりするが、能力者にあったものなので必ずしも武器とは限らない。

創造能力者の高位レベルになると創ったものに身体能力を上げるなどといった効果が付属されていることが多く場合によっては強化型能力者以上の身体能力をもつ創造能力者もいる。

最後の能力者はこれに分類されない特殊能力者である。

彼らは全員がまったく規則性のない特殊な力を持つということしか共通点がない。

強いてあげるなら全員がBランク以上の強大な能力者ということであろう。

イクは一番数の少ない特殊能力者なので実はかなりのレアな力を持っている

憲司は前例がないのでおそらく特殊能力者ということになっている。

「教えてあげようか？」

「っつッ」

いつの間にか近くに来ていた転校生に親しげに話しかけられて尚也とイクはかなり驚いていた。

憲司は尚也がそういえばと言っていた時点で近づいて来るのに気づいていたので特に反応はなかった。

「僕の能力は創造系『疾風短刀』。身体能力を上げるおまけ付きだよ名前は戸倉善」

「ずいぶん気前がいいな何でだい？」

憲司が少し警戒して言った。当然この何でだいはどうしてそんなことを教えるのかという意味が含まれている。

「興味だよ。当然でしょレアなSランクがいるんだから」

そういつて笑う善。悪意はない笑いだっただが見る人を警戒させる笑みだった。

しかしイクは気づいてなく、尚也はそんなことよりにこにこ笑って

イケメンオーラを振りまくことの方が気になっていたらしく憲司以外警戒はしてなかった。

「フーン、耳が早いな。」

「とうぜんですよ、あなたの事は世界中の人が知ってるんじゃないですか？」

「・・・」

善の言った一言が確実に憲司の心をえぐり嫌な記憶を思い出しそうになる。

「そういうのはよくないよ、それで善君何の用？」

イクの言ったことでトラウマから戻される憲司

「ああ御免悪気はなかったんだよ。お詫びに三人に何かを奢るよそれで許してくれないかい？出来れば仲良くしたいんでね。」

「そういうことなら、尚ちゃんと憲ちゃんはどうする？」

そう言つて憲司と尚也に聞くイク。

「俺はいい顔だけ見て嫌うのは俺は好きじゃないし性格知って嫌いになりたいしな。」

「ははいきなり嫌うなんてひどいなあ」

「憲ちゃんは どうする？」

「仕方ない二人が行くなら暇になっちゃうし行くかな。」

憲司はあまり行きたくなかったが何か行かないといけない気がしたので一緒に行くことにした。まあ暇になるので付いて行くという方が多かったが。

「そつえばおごるって何がいい？何でもいいよ。」

「マジか！いい奴だな！じゃああそこのファミレスのいちばんたか
いやつで！」

これを聞いてテンションが上がったのは尚也だ。

イクは恥ずかしそうに苦笑している。

「遠慮ないね。じゃあそこでいいね？」

そう言っただけ聞いたのは当然善だ。今のところ普通にいい性格の好青年といったところだ。

しかし憲司はどうしても少し身構えてしまっていた。

有名なファミレスの中に入ると尚也は遠慮なく一番高いステーキを頼んだ。

善と憲司はハンバーガーセット、イクはちゃっかりデザート系で一番高いロイヤルパフエを頼んでいた。

「そういえば自己紹介がまだだったね私が安住イク、その食い意地が張ってるのが栗木尚也、知ってると思うけどその善君と同じハンバーガーを食べているのが宇治川憲司だよよろしくね。」

抜けてる所がありながらもかなりリーダーシップがあるため委員長もやっているイクが仕切っていた。

「ええよろしくお願いします。まだ来たばかりなんで分からないことも多いので」

「ああ、お前はモテてるけど例外ということで仲良くしてやるよ」

「それはどうも」

善が苦笑する。

「まああんたも悪い奴じゃないみたいだしこれからなかよくやろうぜ」

憲司は最初の胸騒ぎなんて忘れてそんなことを言っていた。

唐突に

「さて、わが校の生徒が狙われている連続傷害事件をどう思う？」

櫻ヶ岡高校の生徒会長、芥川 武は今問題になっっている傷害事件について頼れるパートナー鈴木 英子副生徒会長に意見を求めた。

「おそらく被害者が刃物や鈍器で襲われていることから反能力者団体などの所属者によるものだと思います。」

すらすらと英子がそう言うのと武は難しい顔になり眉を寄せた。

「では、Ｃランクの能力者長谷川三年生がただの武器を武装した犯罪者に負けると思うか？」

そう聞かれ、英子がそれは、という顔をした。

「そうだ。だが実際は長谷川君は重傷だ。これを含めてどう思う？」

そういわれ少し考えこむと英子は事態がさらにややこしいことに気づき彼女にとっては珍しいことに顔色を変えるとその深刻な問題を言った。

「つまり他にも相当な戦力を持った組織が関わっていると？」

「たぶんな、おそらくその目的の分からない組織の方が犯罪者を利用していると考えたほうがいいだろう」

「どうします？」

このまま黙ってみてますか？というように聞く。

「目星はついてる。おそらくの目的も関係のある奴もな」

そう言って不敵に笑った。

善とそれなりに親睦を深めた次の日の昼休み。

「恐いよね。最近いやな事件が続いてて」

「まあな。ここら辺では俺らの学校の生徒しか狙われてないし能力者は皆殺しーとか言ってる奴らの仕業じゃないか？」

憲司とイクは最近学校でみんなの話題になっていることで話していた。

「もっと仲良くしたいのにな、お父さんやお母さんたちみたいな人ばかりならいいのに。」

イクの両親は能力者と無能力者が共存できるような世界を作ることが目標としている『ラージリング』と言う組織の重役なのでこういうじんがいやなのだろう。

しかし自分たちより上にいる能力者が気に入らないといった人間達や能力者を危険とみなす反能力者集団や、逆に無能力者を見下して能力者中心の社会を作ろうとしている能力者至上主義者達の方が多いのでこういう問題が起こるのだろう。

根本的に自分たちと違うものとは分かり合えないのだ。

ただ、イクや憲司たちはそんな難しいことをしようとしているイクの両親を尊敬している。

「まあどっちにしろEランクのあまり無能力者と変わらない奴しか狙われてないししたくない事件だと思うけどな」

正直すぐに捕まると思っていると暗に言う憲司。

「それがそうでもないみたいだぞ」

と少し前にトイレから帰って来た尚也が言った。

「はあ？ちよつとした刃物とか持ったただの犯罪者なんかDランクの人にもボコボコにされるんじゃないの？しかも生徒会長が本腰入れて解決しようとするらしいし？」

憲司は全然問題じゃないと考えていた。

「まあ俺もそう思ってたんだけどさ」

「何が言いたいのか？」

尚也の煮え切らない言葉に訝しげな顔をするイク。

「Cランクの先輩が病院送りにされたってさっき聞いたんだよ。しかもマジらしいしさ」

「まさか」

冗談だろと言いいかけて尚也の顔から冗談じゃないということを感じ

する。憲司。

「ただの犯罪者じゃないってことか、」

「そっかじゃあ気をつけないといけないね」

いったいどんな奴がという顔の憲司にたいしてイクがあまり分かってないような軽い調子で言う。

それを見て憲司と尚也は顔を見合わせてため息をついた。

彼の目的は貴重な立場にいる人物の説得または殺害だった。

残念なことにいきなり殺すのは駄目らしい。

彼はそろそろかなと弦き準備を始めた。

放課後では生徒会の生徒が腕章をして見回りをしていた。

「かなり生徒会も重く考え始めたみたいだな」

「まあ、完璧に安心出来ないけどな」

尚也がそれを見て少し安心したように言ったが、無警戒なのはいただけないと憲司が忠告した

「そうだよ危ないんだからねっ！後で買い物行かない？」

┌
┌
、
、
、
、
、
、
┐
┐

ただ危機管理能力が薄い奴の発言で変な空気になってしまったが、

「憲司君たちも帰るところかい？」

「ああ、善か」

「ねえねえ行くの行かないの？」

あれからそれなりによく喋る仲になった。善に話しかけられた。

「あれさっきから何で無視するの？」

気のせい気のせいと尚也が生温かい目でへこんできているイクをなだめる。

「最近物騒だからどうせなら一緒に帰らない？」

「そうだな、一緒に帰るか。いいよな？尚也、イク」

憲司が確認すると。

「ボディーガードとしては最高だしな」

「そんな風に言うのは良くないし危ないよう」

尚也は軽い気持ちで、イクはまだ微妙に立ち直ってない顔でokした。

歩いていると刃渡り30センチの刃物を持った明らかに怪しいというかもう既に銃刀法違反の方で捕まる男がいた。

「いくらなんでもおかしくね？そんなに死亡フラグ立てたっけなあ」

「この局面でぼけるな、くず」

「酷くね？いくらなんでも憲ちゃん言い過ぎじゃないの？」

うるさい今はそれどころではない、とごまかす憲司とごまかされる尚也。

それよりどうします？と善が言っているが善には対応できない。

何故なら傷害犯にジョブチェンジした男が襲い掛かってきたからだ。よく見ると目が逝ってる。キチガイに刃物はいけません。

「イツイク、ブレイクボイスであいつ適度に痛めつけてくれ！」

おびえる憲司に言われオーケーとまだ危機感を覚えていないイクが憲司に言われたとりに能力を発動した。

「ぐぎやあああああ」

そして襲ってきた男はイクが口を開いて数秒たつといきなり倒れ伏した。

男は白目で倒れ伏している。股間を抑えて倒れているのを見て憲司と尚也はかんがえるのをやめた。

イクが襲われても危機感を覚えていないのは仕方理由があった。というか襲われたと認識していなかった。

なぜなら彼女を傷つけられるものなど世界に200人もいないのだから。

イクの能力は声で少しずつダメージを与えること。

つまり声の振動が伝わればいきなり臓器などへの攻撃も可能なのだ。

「ねえ憲司。イクの力は声の振動がないと使えないの？」

「はあ？まあそうだけなんでそんなこと」

善の質問に訝しげな顔をしながらもピースしているイクを見ながら答える憲司。

そしていきなり善が能力を発動した

「はっ？」

一瞬だった。

善は呆ける尚也とイクを疾風短刀で殴り気絶させ素早くイクを抱きかかえると。

「いやあ、憲司気づくなんてすごいなあ僕は。。。ビルにいるよ。ああそれとイクさんの親とかに言うのはいいけど他の人に言ったりしたら『肉塊がビルにあるかもねえくくく』期限は12時間じゃねー」

そう言いおそらく能力を使い消えた。

くそくそくそつ憲司の頭を占めるのはそんな言葉だった。

違和感に気づいたのは男が襲って来たときだった何故なら『弱すぎた』確かに刃物があれば落ちこぼれのEランクまでなら勝てただろう。だがCランクの能力者にあの程度の無能力者が『負けるはずがない』つまり協力者がいたのだ。

考えてみれば今までEランクの能力者だけが襲われていたのもおかしい。

D、Cランクの方が全体としては多いのだ。

つまり内通者もいたことが分かる。

そしてクラシクに勝てるという所からも絞り込める。

さらにいままでなかったというところから最近来た奴が怪しいというのもあった。

だけど信じたくなかった。

だけどさらわれた以上現実を認識するしかなかった。

唐突に（後書き）

読んでみて変だったので少し変えさせてもらいます。
すみません。

茶番

憲司は走っていた。

向かう先は善の指定したビル。

できれば尚也と一緒に行きたかったが頭を殴られて気を失っていたので道の端っこに寄せておいてきた。

混乱はしていた、でも、嘘だそんな訳がない、なんて無駄なことは言わずに迅速に行動したことは憲司の常人とは違うところだろう。何度か息切れを起こして止まるもそのまま少し休むと走り出す。

そんな事をしているうちにやっと指定したビルに着いた。

ただの廃墟のわりに不気味に感じた。

ひとまず警戒しながら中を見回す。

一階は廃墟の中らしくかなり荒れていた階段を使いゆっくりと二階へ上がる、そこには紐で手足を縛られたイクが横に転がっていた。

「イク！」

「騒がないでよ特に怪我也させてないんだから」

「っ」

いつの間にか憲司の後ろに立っていた善がけだるげに言う

「何の真似だ！ふざけるのにも限度がある！」

「おいおいここまで来て僕がふざけてると思っているのか？冗談はやめてくれよ」

憲司が激昂するもどこ吹く風で受け流し鼻で笑う善。

「まあ、後で理由を教えてあげるよ。でもそんなことより優先することがあるんじゃないの？」

そういつて具現化させた短剣でイクを示す

「くっ」

「そそ、その調子。そーだなあ、憲司が一発僕に入れたらイクちゃんも返すし何でこんなことをしたのかもおしえてあげるよ」

「本当だな？」

「ほんとほんととアブなっ」

いつきに走り出し殴ろうとする憲司だがその拳を一瞬でよけると欠伸をし暇そうな顔でこっちを見る善

「もつとよく狙って」

「こんのっおお」

憲司は能力が使えないからといってそれなりに体も鍛えていて格闘技も少しかじっているそのおかげで身体強化系程ではなくても平均よりはかなり運動はできる。

だがまったくその程度では足りなかった。

フック。アッパー。膝をへし折る反則技。掌底。

どんな手を使っても足を使っても反則技を使っても全て無駄。

そして善の反撃の蹴り。

善にしてみればかなり手加減したのだろう。

だが十分すぎた。憲司を叩きのめす分には。

その蹴りを防ぐこともできずに壁に叩きつけられる。

「ぐがっ」

「おいおいもう終り？これは期待はずれにも程があるな。仕方ない」

そう言っただけで倒れている憲司を見て本当に失望したという感じでため息をつく。

「な、にをするつもり、だ」

そう言っただけでボロボロの状態でも気丈に目だけは睨みつける。

「何って、こっ」

そう言っただけでイクにさっきからずっと持っていた短剣を投げつけた。

「ミシ。」

その時憲司は自分の何処かにある楔のようなものを感じた。

ビキ、ミシ。

そして怒りに任せて砕こうとするとひびが入るのも分かった。

自分の何処かでそれはそのままにしておけという声が聞こえる。

楔は今にも砕けそうになっているのが分かったそして限界までひびが入る。

その時。

かなりの速度でイクに向かっていた短剣が破壊される。

「流石にやりすぎだ看過出来ない」

「もう少し早めに出るべきだったと思いますがバカなのですか？」

短剣を破壊した主と横にいた人は素晴らしい、その人達の顔を見ようとした時に急激な脱力感に襲われて憲司は意識を失った。

「なんだこれ？」

目の前には大きな黒い楔が埋まっていた、他には見回しても何も無い白い空間があるだけだ、何もない白い空間に埋まっているというものなぜ埋まっているか分かるかは不思議だが直感でそう感じるのだ。

その楔を抜こうと手を伸ばす。

パチ、

「起きられましたか？」

いきなり目の前に顔があつた。

「うわっ」

「？」

「お前も結構天然キャラだよな」

目覚めた瞬間に目の前に顔があつて驚き距離をとる憲司、だがなぜ驚いたかまったく分からないという顔で原因の鈴木副生徒会長が首をかしげる、それを見て芥川生徒会長は内心でため息をついた。

「すまなかつたな宇治川君」

「？」

「彼が全て説明してくれるだろ」

意味が分からない憲司が会長の指を指したほうを見るそこには土下座している善がいた。

「え？」

茶番（後書き）

申し訳ありません書き溜めていたものを全て消してしまったせいでうちひしがれていたのと忙しかったせいでこんなに遅れてしまいました。

すみませんほんとすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7306n/>

彼らの日常

2011年10月7日20時41分発行